献血の大切さ

伊勢原市立山王中学校
三年　名渕（なぶち）　結香（ゆいか）

公共施設や病院、学校や大型のショッピングモールなど、定期的に献血バスが止まっているのを、よく見かけます。そして、必ずと言っていいほど、「献血にご協力をお願いします。血液が足りません。」と係の方が、大きな声で呼びかけています。

私は、その呼び掛けに、軽く頭を下げて、通り過ぎることがほとんどでした。

ある日、私は母と買い物に出掛けました。この日も、献血バスが止まっていて、献血の呼び掛けをしていました。その、いつもの光景を見て私は、「どんな人が献血するのかな。注射でしょう。痛いじゃん」。と自然に声が出てしまいました。それを聞いていた母が急に、

「今日は、献血しようかな。体調もいいし。」

とにっこりと私を見て言いました。私は、

「えっ。なんで。痛いよ、やめておきな。」

と母に、反射的に言っていました。私の思いとは反対に、母はどんどんと、献血バスに近づき、

「ちょっと待っててね。」

と受付をしたのです。受付を済ませると、体調などの問診、血圧チェック、説明を受けて、バスに乗り込んで行きました。私は、しばらく外で待っていましたが、係の方が、

「献血って、どんなイメージ。十六歳から献血ができるんだよ。まだその歳にはなっていないから、バスの中を見学してみたら」。

と案内してくれたのです。初めてのことだったので、怖い気持ちと、中が、どんなふうになっているのかという、興味もありました。バスの中に入ってみると、看護師さんが出迎えてくれ、献血にかかる時間や機械の説明をしてくれました。私が想像していたよりも広

く、とても明るい空間でした。

私は、献血ってなんだろうと疑問に思い、献血した血液や、どのように病院で使われるのか、調べてみました。献血によって集められた血液は、そのまま患者さんに使われるのではなく、赤血球、血しょう、血小板などの血液製剤に分けられ、患者さんが必要な成分だけを、輸血することを知りました。私は、献血をしたらすぐに、患者さんに届けられると思っていたので、その細やかな工程にびっくりしました。私は母に、調べたことを話すと、

「なんで、お母さんが、今まで何回か、献血をしていたか、きちんと、話をしたことがなかったよね」。

と、亡くなった祖父の話を、してくれたのです。

「おじいちゃんは病気で、入退院を繰り返していて、入院中に何度も、輸血をしてもらったの。輸血をすると、みるみる顔色が明るく

なって、このおかげで体調がすごくいいよって、笑顔で話をしてくれるの。その姿を見ている家族も、元気をもらってね。病気と戦っているとき、おじいちゃんも家族も、気持ちが落ち込んでしまう。でも、その笑った顔を見ると気分が晴れてね。だから、その時の気持ちは、今でも覚えていて、感謝の気持ちで、いっぱいなの。お母さんは、病気と戦っている人やその周りの人たちに、少しでも笑顔が増えるといいなと思って、献血に協力しているんだよ。怖くて痛いけど、血液は人工的に作れないから、献血はとても大切なんだよ」。と教えてくれました。

私はその話を聞いて、献血は特別なことではなく、病気と戦っている人やそのまわりの方へのプレゼントだなと思いました。

来年私は、献血ができる年令になります。献血をすることは、心配も不安もありますが、一歩を踏み出し、献血に協力してみようと思いました。